

特定非営利活動法人JIPPO

目次:

設立の経緯と今年度の活動	2
国内事業：設立記念講演	2
フェアトレード事業	2
スタディーツアー	3
貧困救済・自立支援：越冬支援	4
調査・研究	5. 6. 7
セス・セバナ孤児院の活動について	8

2008年11月に京都府から認証を得たJIPPOは、内外の社会的な貢献を担いたいという願いから、浄土真宗本願寺派を基盤として発足した。宗教法人の枠組みを超えたNPO法人としての組織づくりに取り組んでいる。

1980年に発足した「曹洞宗東南アジア難民救済会議」を前身とする曹洞宗国際ボランティア会、それを継承したシャンティ国際ボランティア会(SVA)の活動に比べると、日本仏教の既成教団組織から生まれたNGOとしてJIPPOは、およそ30年遅れの後発団体である。

遅れて来た者の有利な点は、多様な活動領域を拓いてきた先進的な団体から学べることである。

欧米のキリスト教会組織を基盤とする強力なNGOと比較すれば、JIPPOから見ると巨人のような特定公益増進法人のSVAでさえ、国家意思に対抗できるような非政府組織とは言えない。しかし、常勤の有給職員1名、非常勤の有給役員1名から出発したJIPPOは、浄土真宗本願寺派からの支援なしには何も始められない状態である。人材と物資の両面で、いつまでも宗門からの援助だけを頼りにしているわけにゆかない。その一方で、このNPOの発足と活動が、浄土真宗に帰依する人びとの社会的な貢献の在り方に対して、大きな刺激を与えることも期待されている。

ごあいさつ

専務理事 中村 尚司

最初の活動としては、スリ兰卡産紅茶の小規模なフェアトレードを始めた。そして12月にミャンマーのサイクロン被災地調査、インドの公正貿易団体調査、2009年1月に明石康氏による設立記念講演会、2月に野宿者の支援活動、3月に紅茶産地を訪ねるスタディーツアーなどの順で、ささやかな事業を実施した。

本格的な事業年度となる2009年度は、設立の趣旨に掲げた四本の柱(貧困、環境、平和および災害支援)を具体化する活動の基礎づくりをする予定である。貧困削減に関しては、フェアトレードの事業を拡大する。その一環として、茶園労働者の子どもたちが通う幼稚園の建設を始める。ミャンマーの学童に文房具を届ける事業も行う。環境問題では、内モンゴルの砂漠緑化活動の調査をし、JIPPOが推進すべき方向について検討する。平和構築については、仏教者の役割を軸にして可能な道を模索するため、タイ寺院による社会貢献から学ぶスタディーツアーを行う。災害支援では、野宿者支援を続けながら、龍谷大学ボランティア・NPO活動センターと協力して緊急支援に対応できるよう準備する。そして会員、協力者、支援者の裾野を広げることに力を注ぐ計画である。

このようにしてNGOやNPOの運営に携わると、個々の事業や活動に必要な資金と人材に関わる悩みは尽きない。しかし、そのような事業経営の課題とともに、私たち仏教系のNGOは、仏教者として生きることの意味を問い続ける必要がある。



もともとNGOという言葉は、政府代表を超えた働きを期待する国連憲章に由来する。NPOという言葉は、出資者には利益を還元しないという米国税法上の規定に由来する。政府の意向に左右されないゆえに、利潤極大化を追求しなくてもよい条件は、私たちの活動を政治的かつ経済的な制約から解放する。その意味では、事業の運営にとっては、たいへん好都合な場である。しかしその好都合な場をほんとうに生かし切れるだろうか。

大阪大学学長の鷲田清一は、その近著『死なないでいる理由』(角川書店、2008年12月刊)で、「自立とは、他人から独立しているということではなく、他人と相互依存のネットワークをうまく使いこなせるということを意味する」と言い切っている。

鷲田のひそみに倣って言えば、呼びかけられることは、呼びかけることでもある。JIPPOの自立とは、浄土真宗本願寺派から独立することではなく、相互依存関係を深めることである。一方だけでは成り立たない、ネットワークの一環である。これは、宗門と宗門系のNGOとの関係だけにとどまらない。政治的かつ経済的な制約から解放されているがゆえに、NGO/NPOはその内部でも、ネットワークの上でも、対等で公正な関係を生かす必要がある。厳しい制約下にある政府機関や利潤極大化の企業に比べて、この点を意識的に自覚的に進めない限り、特定のリーダーの専横や腐敗を招きやすい組織形態である点にも、心すべきであろうことを望みたい。

※JIPPOでは支援対象者の意向を尊重してホームレスではなく野宿者と表現しています。

特定非営利活動法人JIPPO

設立の経緯と今年度の活動

2008年度は、特定非営利活動法人JIPPO（十方・じっぽう）設立の年であり、設立に伴う行政手続きを行うと同時に、今後JIPPOが柱とする諸活動を立ち上げ、経営計画の整備と推進および事業展開を行った。当法人は、「平和構築」「貧困問題」「環境問題」「災害救援・復興」を活動目的に掲げているが、設立初年度の重点活動領域として「平和構築」と「貧困問題」に注力した。

法人としての財政的な問題、特に法人の活動基盤を支える会員の獲得と拡大およびフェアトレード事業の販路拡大に関してはまだまだ課題は残るが、当法人の理念と人材に賛同してくださる方々の支援と協働、ネットワークの中で順調に成果を出すことができた。次年度以降も、社会に示すビジョンとそれを実現するための地道な努力を継続することで、持続可能な活動を行っていく。

国内事業：設立記念講演会

2009年1月19日（月）、龍谷大学大宮学舎清和館3階にて、JIPPOの「設立記念講演会」を開催した。元国連事務次長の明石康氏が「平和構築における宗教者の役割」と題する講演をし、約200名がそれを聴講した。

紛争地域においてその解決に実践的に携わってこられた専門家のお話は、平和構築を活動の柱のひとつとするJIPPOと、それに関心のある聴講者の方々にとって、大きな励みと貴重な教訓となった。



講演をする明石康講師



フェアトレード事業

2008年12月からフェアトレードとしてスリランカ産無農薬ウバ紅茶の販売を開始した。2008年3月31日現在、ティーバッグ281袋、リーフ193袋を販売し、360,985円を売り上げた。JIPPO設立記念講演会、浄土真宗本願寺派のビハーラ関係行事、教化団体の集まりなどで試飲会と即売会を開催し、商品を紹介した。また、個人顧客の約半数は、リピーターとして初回購入よりも多い個数を継続してご購入いただいた。

フェアトレードは通常、「公正貿易」などと訳されるが、フェア



フェアトレード商品のスリランカ産無農薬ウバ紅茶（上：ティーバッグ、左：リーフ）

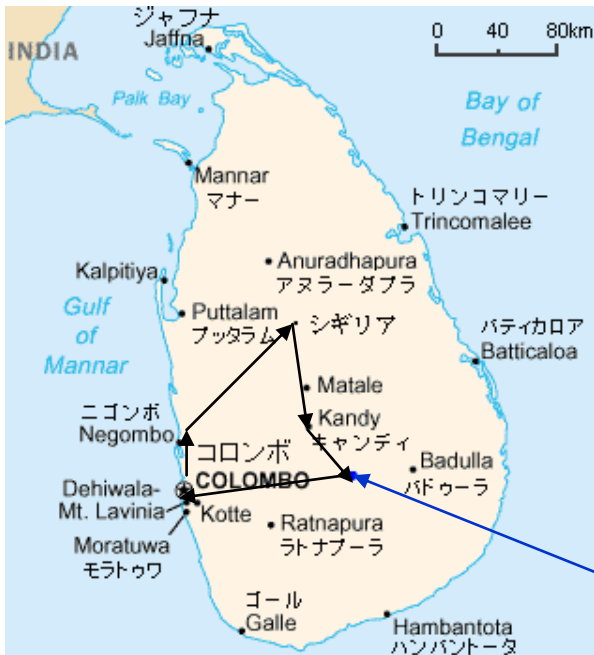
トレードがどのような定義で何をめざすのかについては、それぞれの団体の活動理念に照らし合わせながら、組織ごとに異なる意味づけを行うのが現状である。JIPPOはフェアトレード指針として以下のことを念頭において活動した。

- 1) 経済的・社会的に厳しい状況にある生産者たちの生活環境の改善
- 2) 市場原理の貿易システムにとられない、公平・公正・継続的な貿易関係の構築
- 3) 日本の消費者と現地の生産者との共生を、販売を通して促進させる



特定非営利活動法人JIPPO

スタディツアー（スリランカ）



2009年3月8(日)～16日(月)、「ウバ茶を摘む女性たち:フェアトレードの生産現場を訪ねる」と題するスタディツアーをスリランカで実施した。スリランカ研究者でもある中村尚司JIPPO専務理事を含む8名で、JIPPOがフェアトレード商品を購入しているウバ茶の生産地を訪れた。

茶園プランテーションの責任者であるマネージャー夫妻の全面的な協力によって、摘まれた茶葉が製品に加工されるまでの工程を見学し、茶のテイスティングや、茶木の苗木を育

てる現場および茶園労働者の住居を訪問することができた。中村専務理事と現地コーディネーターを介して、スタディツアー参加者が茶園関係者や労働者にインタビューを行い、茶摘み作業を体験させてもらった。

茶摘みの作業は、細やかかつ重労働だということがよくわかり、彼女たちの摘む茶葉が、工場で丁寧に加工され、私たちのもとに届くのだということを実感をもって感じる事ができた。

参加者の声：

■私たちが訪れたグリーンフィールド茶園で働く人々は、実際に見て、また説明を聞いた限りにおいては、予想していたような劣悪な環境で働いているようには見られなかった。日本と単純に比較することはできないが、働いている人も自分の仕事には誇りを持っているようにも感じられ、また、住宅も狭いながらも劣悪とは呼べないと思われた[60代男性]

■生産者は誇りを持って茶葉を摘み、給料を受け取り休日もある。…(中略)…日本に住み、彼らの生活を思い描いているだけでは想像の域を出ないが、実際に訪問したところ、実は当り前の生活を当たり前を送っていることを確認できた[40代女性]



茶園労働者に話を聞く様子



ウバ紅茶の茶葉を摘む様子

特定非営利活動法人JIPPO

貧困救援・自立支援事業：越冬支援

昨今の経済情勢の悪化に伴い、京都の野宿者の暮らしもたいへん困難になっている。JIPPOは、龍谷大学ボランティア・NPO活動センター（以下NPOセンターと略称）と協力して、2009年1月から越冬支援事業を始めた。これまで京都の支援団体の取り組みが弱かった、高瀬川と山科川の下流域の橋の下などで暮らす人びとを対象にして、支援活動に取り組んだ。2008年3月末までに3回、物資配給と聞き取り調査を行った。

債権者に追われて家に帰れなくなった人、歯の治療が必要だが社会保険に加入していない人、住民登録をしていない人など、法律相談や医療相談の必要も痛感した。2008年度の試験的な支援活動を基礎に、今後JIPPOとしてどのような支援をすべきか、京都市地域福祉課、「京都・夜回りの会」や龍谷大学（NPOセンター）などの関係者と協議を深めていく。

これまでも野宿者問題に、漠然とした関心を持っていましたが、なかなか自分のこととして考えることが出来ていませんでした。しかし、ご縁があつてこの活動に参加し、リアルな自分も関係するものとして考えるようになってきました。

野宿者の人とお話させていただくと、世の中の「厳しさ」「しんどさ」、人間の「優しさ」「強さ」を痛感します。少しの支援がなかったために、少しの歯車の狂いのために、あっという間に野宿者になってしまう現状が今の日本にあり、その反面、そのどん底の中で同じ野宿者の人に救われ、（本当に最低限ですが）日々の糧を得ながら生活されている現状に直接出会うからです。

野宿者の方に私たちは何が出来るのでしょうか？「住居を！」「仕事を！」必要なものはたくさんあります。今は、緊急支援として支援物資をお渡ししていますが、その活動だけに満足するのではなく、もっと戦略的に問題解決に向けた働きが出来ればと思っています。

（龍谷大学ボランティア・NPO活動センター：竹田職員）



野宿者に支援物資を届けるスタッフ

【事前調査】

- 日時：2009年1月28日（水）
および30日（金）
- 活動場所と対象者：東西高瀬川と山科川に居住する野宿者
- 活動者：中村JIPPO専務理事、NPOセンター大石課長、NPOセンター竹田職員、龍谷大学学生、JIPPO職員
- 活動内容：支援物資（衣類、食料など）を携行し聞き取り調査

【第1回支援活動】

- 日時：2009年1月30日（金）
- 活動場所と対象者：東高瀬川（三雲橋から三栖橋まで）川沿いに居住する野宿者7～8名（不在者には、テント外に配給品を残すか、仲立ちをしてくれた野宿者に預けた）
- 活動者：中村JIPPO専務理事、NPOセンター竹田職員、龍谷大学学生、JIPPO職員
- 活動内容：支援物資（衣類、食料など）の配布および聞き取り調査

【第2回支援活動】

- 日時：2009年2月2日（月）
- 活動場所と対象者：西高瀬川沿いに居住する野宿者9～10名不在者には、テント外に配給品を残すか、仲立ちをしてくれた野宿者に預けた）
- 活動者：中村JIPPO専務理事、NPOセンター竹田職員、龍谷大学学生、JIPPO職員
- 活動内容：支援物資（衣類、食料など）の配布および聞き取り調査

【第3回支援活動】

- 日時：2009年2月4日（水）
- 活動場所と対象者：山科川（小野小学校付近から栗稜中周辺まで）川沿いに居住する野宿者9～10名（不在者には、テント外に配給品を残すか、仲立ちをしてくれた野宿者に預けた）
- 活動者：中村JIPPO専務理事、NPOセンター竹田職員、龍谷大学学生、JIPPO職員
- 活動内容：支援物資（衣類、食料など）の配布および聞き取り調査



特定非営利活動法人JIPPO

調査・研究

～サイクロン被災現場における学校修繕・建設事業の視察（ミャンマー）～

- 目的: 今後の活動拠点調査研究に資するため、東南アジアにおける現地NGOの視察を行った。
- 対象NGO: BAJ (Bridge Asia Japan: ブリッジ・アジア・ジャパン) …1993年設立、東南アジアを中心に活動するNGO。インフラ整備事業で多くの実績がある。
- 日時: 2008年12月15日(月)～22日(月)
- 視察地: エヤワディ管区におけるサイクロン支援現場。管区内のデルタ地帯に点在する視察地5カ村の学校建設現場およびモバイル・ワークショップのサイト



視察地(チンシャー村)BAJエンジニアが考案した沿岸地域対応型の学校建設現場、政府規定のものより安価(1/3程度)で建設が可能



視察地(ミヤタルウト村)沿岸地域対応型学校建設の基礎工事現場



デリーにあるチベット難民のコロニーチベット人が好むタルチョ(五色旗)が建物の上にはためいている

コロニー入口の様子



～インドにおける現地NGO視察（インド）～

今後の活動拠点調査研究に資するため、デリーに事務所をおく次に述べる3団体を訪問した。

【中央チベット行政府教育省】

■ 日時: 2008年12月23日(火)

■ 組織の性格: 中央チベット行政府(いわゆる亡命チベット政府)の省庁で、主に南アジアに分散するチベット難民子弟の教育を受ける権利の確保と執行。現行の重点活動は、老朽化あるいは資金不足で建設当初から不備のある学校施設の修繕事業。

特定非営利活動法人JIPPO

調査・研究つづき

【インド・ボランティア保健協会:VH AI (Voluntary Health Association of India)】

- 日時：2008年12月23日(火)
- 組織の性格:フェアトレード団体。
インド政府保健・社会福祉省と協力して、インド各州に支部を開設し、行政の支援の届きにくい地域に、健康・衛生・家族計画に関する啓蒙活動を行う。現行の重点活動は、①ラジャスタン地震発生後の女性の収入確保事業、②カシミール紛争地帯における女性の収入確保事業、③アルナーチャル・プラデーシュ州における学校修繕事業。



インド：上



フェアトレード商品を販売する店舗



支援概要について説明をするプロジェクト責任者



支援概要について説明をするプロジェクト責任者

【タラ・プロジェクト:TARA Projects】

- 日時：2008年12月23日(火)
- 組織の性格:フェアトレード団体。
フェアトレード収益を資金源として、インド国内の困窮地域、被災地、紛争地の支援を行う。在庫を保管しないためのネット販売ゆえ、外国の顧客が多い(インド国内販売は少ない)。現行の重点活動は、①女性と子どものための学習センターの建設・運営、②ビハール洪水被災地支援活動(支援キャンプ2カ所、第3フェーズとして医療支援)。



フェアトレード商品(アクセサリ)を作る女性たち



調査・研究つづき

～インドにおける研修への参加（インド）～

特定非営利活動法人JIPPO

学んだファシリテーション技術を南インドの農村をフィールドとして、実践トレーニングを行う



■研修名: マスターファシリテーター養成講座(上級編)～フィールド実践トレーニング～
村人が作成した図について質問する様子

■日時: 2008年12月24日(水)～29日(月)



■研修の目的: 参加型開発研究所主催の「マスターファシリテーター養成講座」(中級編)で、研修受講経験のある者を対象にし、講座で今後の工期について話し合う様子

■研修生: 3名 ①(社福)大阪府社会福祉協議会 社会貢献室 高齢者医療・健康・福祉サポート機能等支援員、②元国連人口基金東京事務所 研究員/コミュニケーション・コンサルタント、③榎木美樹: JIPPO事務局員

■講師: 和田信明(特定非営利活動法人SOMNEED代表理事)

■アシスタント: SOMNEEDの海外事業コーディネーター他、インド人現地スタッフ数名

■成果: ①開発ワーカーにとっての重要な能力のひとつである

JIPPO専従職員 榎木美樹

～事務局便り～

私はこれまでインド仏教徒による運動がどのようにコミュニティや個人の社会的地位を向上させるのかについて研究してきた。インドで仏教徒といえば、多くは被差別階層出身だと考えられている。

民衆による社会運動(今日でいうNGO活動)がインド社会を変革し伝統へ挑戦している現実を目の当たりにしてきたのだが、今般、縁あってJIPPOの専従職員になった。

浄土真宗は混迷の中世期にあって人間平等を唱え、今日まで実践してきた集団である。このような背景をもつ教団を基盤として発足したJIPPOで働けることを私は心から誇りに思う。日本という土壌で、仏教的視点に立ったいかなる社会貢献が可能なのか、JIPPOの活動から学んでいきたい。

JIPPO非常勤スタッフ
藤原西兎

JIPPOに関わり半年が過ぎます。JIPPOがスリランカの支援に取り組むことを聞き、ぜひ活動に参加したいと思いました。私は現在、龍谷大学の学生でもあります。地域研究ではスリランカの紛争問題について卒業論文を書く予定です。スリランカ研究で有名な中村尚司専務理事に誘っていただき、JIPPOにかかわることになりました。活動からは日々学ぶことが多く、早く一人前になれるように頑張っていきます。

JIPPO非常勤スタッフ
古寺瑞代

インド北西部のダライ・ラマ14世のチベット亡命政府があることで知られるドラムサラがご縁で榎木さんからお声をかけていただき2月よりJIPPOでお仕事をさせていただいております。私の担当は経理ですが、JIPPOに関わるにつれてJIPPOが目指している4つの活動目的の一端でも担えればという思いを強くしています。

特定非営利活動法人JIPPO

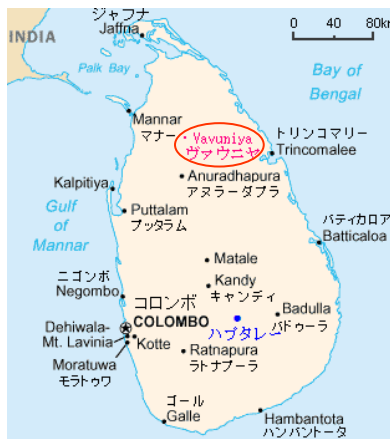
セス・セバナ孤児院の活動について

スリランカには現在、25年もの長きに亘る内戦終結後、約30万人のタミル系難民（国内避難民）がいます。親や兄弟を失った子どもたちは孤児となって、行くあてもなく路頭に迷っている状況です。このような状況を見捨てることができず、孤児を引き取って寺院で養育しているシンハラ人仏教僧侶がいます。アタンバガスカダ・カリヤーナ・ティッサ師です。同氏はセス・セバナ孤児院を開設して0歳～18歳までの孤児82名を養育しています(2009年7月現在)。

JIPPOは、このようなカリヤーナ・ティッサ師の活動を支援します。師の活動はタミル人孤児の支援をシンハラ人僧侶が行うという意義をもち、民族不和で苦しんできたスリランカにとって、本孤児院の取り組みは、両民族融和の象徴であり、多文化共生システム構築のモデルとなると考えるからです。

内戦の終結による難民の増加に伴い、国連からもセス・セバナ孤児院に対して、孤児の追加収容要請が出ていますが、経済的・人員的制限により対応し切れていないのが現状です。

JIPPOはカリヤーナ・ティッサ師の孤児院を支援するにあたり、(財)トヨタ財団の「アジア隣人プログラム」、独立行政法人国際協力機構(JICA)の「世界の人々のためのJICA基金」及びパナソニック(株)の「Panasonic NPOサポートファンド」などに助成金申請をしております。



ヴァウニヤ孤児院所在地



ヴァウニヤの孤児



孤児たち

特定非営利活動法人JIPPO

〒600-8501 京都市下京堀川通花屋町下ル
本願寺門前町本願寺内

電話 : 075-371-5210

Fax : 075-371-5217

E-mail : office@jippo.or.jp

ホームページ : <http://jippo.or.jp>

